‘Home’ in Tokyo

東京プロジェクトスタディ3

確かさと不確かさの間で生き抜く

‘Home’ in Tokyo

東京プロジェクトスタディ

‘Home’ in Tokyo

確かさと不確かさの間で生き抜く

「ここは自分の‘Home’だ」という感覚は、何によってもたらされているのでしょうか。

それは、他者や生き物やモノとかかわりながら暮らしを営むなかで、芽生えるものかもしれません。一方で、関係性の変化や予期せぬ出来事によって、その感覚が失われることもありえます。そのように考えると、「自分の‘Home’」という感覚は、確かさと不確かさの間で揺れ動く、変化と可能性に満ちたものと言えます。

東京は、全国のなかで最も移動者数が多い流動的な都市です。進学、家族の事情、仕事、災害など、多様な理由により東京で暮らす人がいます。彼／彼女にとって、‘Home’とはどのような意味で、何によって成り立っているのでしょうか。さまざまな環境や条件のなか、自分の‘Home’と感じられる工夫をして生き抜く人々の日々の実践に着目します。

このスタディでは、自分や他者にとっての‘Home’のありようを理解するための態度や方法を学び、映像作品（プロトタイプ）をつくります。

—— 東京プロジェクトスタディとは

Tokyo Art Research Lab「思考と技術と対話の学校」で展開する、アートプロジェクトの核をつくるための実践です。“東京で何かを「つくる」としたら”という投げかけのもと、ナビゲーターが参加者とともにチームをつくり、スタディ（勉強、調査、研究、試作）を重ねます。

イントロダクション ____ P.03
目次 ____ P.05
‘Home’が揺らぐとき｜大橋香奈 ____ P.07
ナビゲーター、マネージャー紹介____ P.08
ゲスト講師 ____ P.09
参加メンバー紹介 ____ PP.10–13
活動日記 ____ PP.15–39
作品ノート ____ PP.41–65
参考資料 ____ PP.66–69
マネージャーメッセージ｜上地里佳 ____ P.70
編集後記｜ジョイス・ラム____ P.71

‘Home’が揺らぐとき

大橋香奈（映像エスノグラファー）

私は生まれてからこれまでに、国内外で20回の引っ越しを経験しました。ひとつの家、地域に定住することなく転々としていたので、唯一の‘Home’と呼べるような場所がありません。私にとって‘Home’は特定の場所ではなく、移動するたびにつくり直し更新される、自分を取り巻く多様な関係性の拠点のようなものです。ひとつの場所にしっかりと根を張って暮らし続けてきた人からすると、確かな拠り所なく漂っている「根なし草」のように思われるかもしれません。私も、自分の経験をネガティブにとらえていた時期がありました。けれど、ジョン・アーリ（1946–2016）という社会学者が書いた、いくつかの本に出会ってから考え方が変わりました。アーリは自身の研究のなかで、「移動（あるいは移住）」の経験の持つ意味や価値に目を向けています。私は、アーリの本を読んで、さまざまな背景を持つ人々の移動（移住）の経験と、彼／彼女にとっての‘Home’という感覚がどのようなものなのかに興味を持つようになりました。

このスタディでは、全国のなかで最も移動者数が多く流動的な都市である東京で生きる人々にとって、「自分の‘Home’」という感覚はどのようなもので、何によってもたらされているのかを、参加者とともに考え、調査し、映像で表現してみたいと思っています。そしてその過程で、社会学、建築、デザインなど、異なる分野の専門家をゲストに招き、調査や表現のための態度や方法も学びます。

このスタディが、自分にとっての‘Home’の意味を考え直したり、他者にとっての‘Home’の意味をよりよく理解したりするきっかけになることを願っています。また、将来、想定外の移住をしなければならなくなったり、確かだと思っていた自分の‘Home’が揺らいだりしたときの拠り所になることを期待しています。

ナビゲーター

大橋香奈

映像エスノグラファー

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程修了。博士(政策・メディア)。大学卒業後、サントリーホールディングス株式会社に5年半勤務し、健康食品のマーケティングに従事した。退職後、フィンランドでの活動を経て、英国のMet Film Schoolドキュメンタリーフィルム制作プログラム修了。国内外で20回の引っ越しを経験したことから、博士課程では「移動」の経験と「家族」のあり方に関する映像エスノグラフィー研究を実践した。2019年度現在、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科助教(有期・研究奨励Ⅰ・非常勤)および、慶應義塾大学、女子美術大学、実践女子大学にて非常勤講師を兼任。

スタディマネージャー

上地里佳

アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー

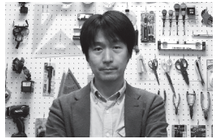
1988年沖縄県宮古島市生まれ。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了後、東京アートポイント計画「三宅島大学(2011-2013)」のアートマネージャーとして携わる(2013)。2014年より富山県氷見市を拠点とするアートNPOヒミングのアートマネージャーとして、市民とアーティスト、行政との協働のかたちを模索しながら、アートプロジェクトの現場運営を担う。2016年4月より現職。現在は、東京アートポイント計画事業「小金井アートフル・アクション！」「移動する中心｜GAYA」、および人材育成事業「Tokyo Art Research Lab」を担当。

ゲスト講師

加藤文俊

社会学者
慶應義塾大学環境情報学部教授

1962年京都府生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。龍谷大学国際文化学部助教授などを経て、現在、慶應義塾大学環境情報学部教授。2003年より、場のチカラプロジェクトを主宰。学生たちとともに、全国のまちを巡りながら“キャンプ”と呼ばれるワークショップ型のフィールドワークを実践中。2010〜2011年「墨東大学」、2011〜2013年「三宅島大学」、2014年「三宅島大学誌プロジェクト」に参画。



岩佐明彦

法政大学デザイン工学部建築学科教授
博士(工学)／一級建築士

1970年兵庫県生まれ。東京大学大学院博士課程修了。新潟大学工学部准教授を経て、2015年より法政大学デザイン工学部建築学科教授。新潟県中越地震をきっかけに応急仮設住宅の居住環境支援に取り組む。近著に『仮設のトリセツ』(主婦の友社、2012)、『まち建築—まちを生かす36のモノづくりコトづくり』(日本建築学会編、彰国社、2014)などがある。

冨永美保＋伊藤孝仁

トミトアーキテクチャ
tomito architecture

冨永美保と伊藤孝仁による建築設計事務所。2014年に結成。日常への微視的なまなざしによって環境を観察し、出来事の関係の網目のなかに建築を構想する手法を提案している。主な仕事に、丘の上の二軒長屋を地域拠点へと改修した「カサコ／CASACO」、真鶴半島の地形のなかに建つ住宅を宿＋キオスク＋出版社へと改修した「真鶴出版2号店」などがある。

水野大二郎

デザインリサーチャー
京都工芸繊維大学KYOTO design lab特任教授

2008年Royal College of Art ファッションデザイン博士課程後期修了、芸術博士(ファッションデザイン)。京都大学デザインスクール特任講師、慶應義塾大学環境情報学部准教授を経て現職。デザインと社会を架橋する多様なプロジェクトの企画・運営に携わる。編著にファッション批評誌『vanitas』(アダチプレス)、共著書に『インクルーシブデザイン』(学芸出版社)、『Fashion design for living』(Routledge)など。

参加メンバー

活動日の冒頭では毎回、挨拶を兼ねて全員が同じお題に答えていく「チェックイン」を行いました。
参加メンバーの個性やその人の日常が垣間見えるチェックインの答えを、参加メンバーのプロフィールの代わりとして部分的に紹介します。

第①回	8月17日	最近食べて一番おいしかったもの
第②回	8月31日	最近ハマっているもの
第③回	9月7日	最近驚いたこと
第④回	9月28日	今日身につけているもので気に入っているもの
第⑤回	10月5日	最近感じた秋
第⑥回	10月26日	子どもの頃に好きだったお菓子
第⑦回	11月2日	好きな鍋の味と素材
第⑧回	11月16日	※個人面談のため、チェックインなし
第⑨回	12月7日	今週出会ったもの・こと・ひと
第⑩回	12月21日	贈った／贈られたもの・ことで印象的だったもの・こと
第⑪回	1月11日	食べないと新年が始まらない食べもの

小池理奈（大学生）

④この間買ったノート
⑥よく食べていたモンパン
⑨道の駅で買ったどうしようもなく硬いキウイと、どうしようもなく渋みのある柿

小島和子（編集者）

①ビールが進む中華風のアヒージョ
④和太鼓の稽古用のバチ
⑤部屋の奥まで日差しが入るようになった

神野真実（デザインリサーチャー）

①ようやく食べられたスープカレー
③日焼け止めのSPFの基準は各会社の規格で決まっていること
④増税前に買った大人の巻き時計

高山伸夫（編集者・ライター・会社役員）

③自転車のお婆さんが子どもを避けようと転んで、プロレスラーのように額から出血したこと
⑤まだ夏だと感じる
⑨知り合いのアート作品に蜘蛛が巣をつくっていて、自然と芸術との境界線の曖昧さを感じた

田中翔貴（建築士）

③カフェで最近読んだ本の著者が隣に座っていたこと
④伊勢神宮の近くで買ったパワーを感じる数珠
⑩転職したときに、「ご飯をめっちゃくちゃ食べているから」という理由でもらった土鍋

鄭禹晨（翻訳者・編集者）

①名古屋の手羽先
②ハイボール
④最近買ったデジタルカメラ

西井彩（大学院生）

①木村屋の食パン
④最近買ったグレーの靴
⑨ゲンロンカフェで人形劇専門家の話を聞けておもしろかった

橋本隆史（会社員・デザイナー）

⑤銀杏が車に踏まれて匂いがすること
⑦スルメイカ
⑨千葉市美術館に行く道に屋台がたくさん並んでいて、千葉ががんばっていていいなあと思ったこと

橋本晴加（農家の孫娘（家出中））

③朝に公園で遊んでいた子どもたちが『貞子』の音楽を歌っていたこと
⑤スーパーで買った柿を食べたこと
⑩入浴剤をもらったので、普段使っていないお風呂とついでにトイレを掃除して綺麗になったこと

初田美紀子(家族の絆を謳う臨床心理士)

②フィギュアスケートをやっている次女の2分間の演技を上手に撮るために試行錯誤していること
③Facebookにうろこ雲の写真を投稿する人が増えたこと
⑨「気分ログ」というアプリの開発者にメールしたら、イベントをともに開催することになった

ビッチャー・スパンタリダー(大学生)

①南タイ料理
⑤秋に似合うカバンを使うことになったこと
⑥「ベンベン」というタイのお菓子

牧野岳(大学生(社会学))

①フェスの帰りに食べたピザ
④アムステルダムの量り売りで買ったサッカーチームのジャージ
⑤エアコンを使わなくなったこと

松尾葉奈(大学生)

③卒業論文のアドバイザーを通して、自分と同じようにフィンランドに興味を持っている学生とつながったこと
④高校卒業の祝いにもらったピアス
⑨参加したトークイベントのゲストが「建築だけではなく人の暮らしに興味がある」と話していてすごく共感したこと

ナビゲーター

大橋香奈(映像エスノグラファー)

③隣に座っていた女の子が近くにいた不審な男性を警戒していたら、別の人が通報してその男性が捕まったこと
④キッズ用の靴
⑤朝5時に起きるときに外はまだ暗いこと

スタディマネージャー

上地里佳(アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー)

③神津島に出張したときに、携帯の契約は大島でしかできないことに驚いた
⑤従兄弟のLINEグループに運動会の席取りについてのメッセージが届いていること
⑦醤油味、白菜

記録スタッフ

染谷めい(大学生)

①母と一緒につくった台湾のお菓子
③ムーミンの本名が「ムーミン・トロール」であることを知ったこと
④お婆ちゃんからもらった翡翠のブレスレット

記録スタッフ

ジョイス・ラム(エディター)

③帰り道に同居人にばったり会ったら、自分といつも違うルートを使っていたこと
⑤行きつけのカフェで栗のジェラートを食べたこと
⑩友人にコラージュをつくってもらって、その絵柄が表紙になっているノートを製本して彼女にプレゼントしたこと

記録スタッフ

森部綾子(大学院生)

②車でいかに燃費良く走れるのかを考えること
③運転中に虫が車のなかに入ってきたこと
④ずっと気に入ってメンテしながら履き続けている革靴

記録スタッフ

廣瀬花衣(大学院生)

⑥鳩サブレ
⑦白菜と豚肉のミルフィーユ鍋

活 動 日 記

計11回の活動日に行われたレクチャーやワークショップ、
ディスカッションの記録をお届けします。
活動日に紹介された参考資料(本文内に下線で表記)は、
PP.66–69にまとめています。

◉毎回の記録は、写真・音声・動画撮影で行い、記録スタッフが毎回活動日記を作成しました。
◉記録スタッフは、活動日のレポートを作成するスタッフ、ナビゲーターや参加者の思考の移り変わりを編集的な視点から記録するスタッフ、という体制で構成しました。
◉参加者自身がスタディについて記録するために、非公開であることを前提に、ひとり一冊ずつ記録ノートを支給しました。
◉毎回の活動日の最後に「リフレクションカード」の記入を行い、活動のプロセス資料として公開します。
◉日々のやりとりは、主に「Slack」を活用。チャンネルとしては、「#返事して」「#読むだけ」「#参考資料」「#random」「#自己紹介」を設定しました。その後は活動の進行状況に応じて、適宜チャンネルを追加します。

第1回 2019年8月17日［土］

‘Home’ in Tokyoに取り組むために

スタディ3「‘Home’ in Tokyo」は「東京を舞台とした‘Home’のとらえ方を模索することで、東京の姿を浮き彫りにする」ことを目指し、プロトタイプとしての映像制作に取り組む。回を進めていくなかでの思考／試行のプロセスを記録するために、参加者ひとりひとりに同じノートを配布した。「チェックイン」(→PP.10–13)という方法を用いた全員の挨拶の後、まずはナビゲーターの大橋香奈の研究紹介と、大橋が4年間かけて構想・制作した映像作品*『移動する「家族」』(2018年)*の上映を行った。

国内外の引っ越しを20回経験している大橋は、「私には唯一の‘Home’と呼べるような場所がない」と語る。それをネガティブにとらえていた時期もあったが、イギリスの社会学者である*ジョン・アーリの著書*(→p.67)に出会い、移動の経験に着目する研究へと足を踏み入れることになる。

かつては、国境を越えてしまうと家族の関係が希薄になりがちだった。現在では、移動手段の発達やSNSの広がりなどによって、国境を越えた情報の共有が容易になった。これにより、家族間のコミュニケーションの仕方だけではなく、「家族」のあり方自体が大きく変化してきた。*『移動する「家族」』*は、このようなトランスナショナルな（＝国境をまたがる）つながりが可能になった社会で生きる、5人の「家族」のあり方を調査し、調査協力者の5つの独立したストーリーを束ねたオムニバス映像だ。この作品は商業映画や芸術作品ではなく、研究作品としての映像である。映像エスノグラフィーと呼ばれる、調査者と調査協力者の協働的な関係のなかで、彼や彼女が生きる現実について解釈し、映像作品をつくるという方法が用いられている。

*『移動する「家族」』*には、「一方的に描くことなく、調査協力者の納得のいく方法を軸につくっていきたい」という大橋の思いが込められている。「調査協力者が自分のインタビューを振り返ったときに、より適切な言葉を使いたいということもあった。だから、私が一方的に編集して完成させるのではなく、調査協力者とともに振り返り、彼や彼女が語り直したナレーションをベースに映像を制作した」と語った。

上映後は、参加者ひとりひとりが「家族」について考えて、コメントカードに書く時間を設けた。「あなたにとって『家族』とは？」の問いに対して、「常に心に引っかかっている存在（良くも悪くも）。自分が何か選択決断するときにどこかで影響を受けている」「家族となる人たちとの関係によって変わるかもしれません」「自分が許せない自分のことを許してくれる存在」などといった言葉が寄せられた。すぐに書き上げた参加者もいれば、最後まで悩んでいた参加者も。自分の家族観を振り返りながら、それぞれの‘Home’に対して想いを馳せていたのだろう。

後半は、「Life in a bag」というテーマで他己紹介のペアワークショップを行った。お互いのカバンの中身についてインタビューし、持ち物を撮影し、最後にその写真を使ってペア相手を紹介した。「調査する・調査されるとはどういうことなのか？」を、短い時間のなかで実際に体験するワークショップだ。初対面のペアがほとんどだったが、インタビュー中の参加者は笑顔を浮かべ、話は盛り上がりを見せていた。モノを介すると自然に相手の話を引き出せて、自分のことを話すことへの抵抗が薄れるようだ。

2分の他己紹介の後には、本人からコメントをもらう時間を設けた。「自分でも意識していなかったことを言っていただけて、ああそうだなと思った」や「自立していると初めて言われました（笑）」というように、自分の意識していなかった一面を再認識したというコメントが多くあった。調査をする立場と調査される立場がどんな気持ちを抱くのか、どちらも体験することで、実際に調査を行うときに意識することがわかったという振り返りもあった。*『移動する「家族」』*の制作手法のように、参加者一同も、相手を知り、表現して、相手からのコメントをもらうことを経験したのだ。

最後に、これからへの期待を込めて語った大橋の言葉で、この日の活動を終えた。「『ここが自分の‘Home’だ』という感覚は、何によってもたらされているのか。自分と相手の‘Home’のあり方を理解することで、どこでも生きられる力や、いまいるところをより心地良く生きる力を身につけるきっかけになるかもしれない」。

第2回 2019年8月31日［土］

調査協力者との関係を考える

初回よりも緊張感がほぐれ、穏やかな雰囲気で始まった。「具体的な調査方法に正解はない。『調査者と調査協力者が協働的な関係にある』ことを大切にしながら、半年間、参加者とともに模索していきたい」と、ナビゲーターの大橋は語る。

前半は、映画『キッチン・ストーリー』(2003年)を鑑賞し、参加者一同でディスカッションを行った。『キッチン・ストーリー』は、ベント・ハーメル監督によってノルウェーで公開された映画だ。スウェーデンの家庭研究所から派遣され、ノルウェーの独身男性の台所での行動を調べるためにやってきた調査員のフォルケと、調査対象となったイザック。調査員と調査対象者の交流が禁止されているなか、フォルケとイザックが次第に言葉を交わすようになり、少しずつ仲を深めていく。1990年代に盛んに行われていた、人々の生活への工学的アプローチへの風刺が背景にあり、監督自身が「ものを扱うように人を調査できないだろう」と語っている。また、映画のなかでは、調査対象であるイザックが、天井に穴をあけることで、調査員のフォルケを逆に観察していたという描写もある。「調査者が調査に入った時点で、調査協力者の‘ふつう’の生活は‘ふつう’ではなくなってしまう」「私たちは、通じ合えないことが何よりのストレスだ。調査の前にお互いの関係を大切にしなければならない」など、映画を鑑賞した参加者のディスカッションでは、さまざまな気づきが共有された。

後半は、慶應義塾大学の加藤文俊先生による講義の時間だった。フィールドワークを行う上での三人称・二人称・一人称的なアプローチと、「ふつうの人」への視点を語った。

『キッチン・ストーリー』の調査条件のように、調査者は基本的に三人称的な(傍観的な)立場で現場にかかわることが前提になることが多いが、実際のフィールドワークの現場で、調査者が傍観者であり続けることはできない。現場に通っていれば言葉を交わすようになり、フォルケとイザックのように、やがて調査者と調査協力者の関係に変化が生まれる瞬間が訪れる。だからこそ、個人的関係を意識し、対象の呼びかけに応える存在として現場にかかわる、二人称的な(協働的な)アプローチで、自分と相手の関係を豊かにしていくことが大切になってくるという。さらに、フィールドワークには欠かせない一人称的な実践として、振り返りがある。フィールドノートやジャーナルといった記録によって、現場にいた調査者である私に立ち戻りながら調査結果を解釈していく。

また、「スゴイ・エライ」や「コワイ・ヒドイ」は社会学的に注目されやすいことを踏まえて、「ふつうの人」への関心を持つことの意味についても語られた。白熱した議論を呼んだのは「ふつうの人なんていないと思える」という参加者のコメント。確かに、調査対象者へと接近することで、調査対象の生活にもその人なりの背景や工夫があることがわかるため、「ふつう」ではなく特別に思えるようになる。それでも「ふつうの人」の大切さを説いているのは、フィールドワークでは、調査者が自分とは異なる「スゴイ・エライ」や「コワイ・ヒドイ」といったマージナルな部分を目指してしまいがちだからだ。調査者にとっての「ふつう」とは異なるアプローチをとることで、「ふつうの人」が生きている豊かで複雑な世界が見えてくるということかもしれない。

参加者の関心が高かったのは、「私とあなたという二人称的な関係でつくられた作品を、第三者に公開することはどのようにしたらできるのか」という問いかけ。大橋の場合は、第三者に公開することを前提に、二人称的な協働を重視して、『移動する「家族」』を制作した。また、制作者である大橋自身が上映に立ち会い、鑑賞者のリアクションを見届けられる範囲でのみ上映を行うという手法をとっている。しかし、制作や公開の仕方については色々な選択肢があるので、それぞれの作品において適切な方法を調査協力者とともに模索していく必要があるだろう。

‘Home’は人によってとらえ方が異なり、繊細に扱うことが求められる。人の暮らしに密接した調査とは何か。協働とは何か。調査協力者と協働的な関係を築き上げていくにはどんな方法があるのか。同じ東京で暮らす人も、それぞれ異なる‘Home’の感覚を持っていることだろう。13人の参加者ひとりひとりが、これから行う調査への少しの不安を抱きつつも、大きな期待を膨らませた回となった。

第3回 2019年9月7日［土］

被災地における‘Home’のあり方

今回は前半にいくつかの映像作品を鑑賞し、後半は法政大学・岩佐明彦先生がレクチャーを行った。大橋は、制作プロセスは対話的・協働的（二人称的）であることを目指したいとのこと。このスタディでは、調査協力者との対話のなかで、その人の‘Home’のあり方をリサーチし、一緒に映像作品を制作する計画だが、作品の表現方法はさまざまな可能性がある。同じ人物についての語りでも、調査協力者自身のナレーションを用いて一人称的に語る「私は」も、調査者が三人称の目線から語る「彼／彼女は」もありえる。

まず鑑賞した作品は、羊とひとり暮らしの男性との種を越えた友情を描いた作品*『Peter and Ben』(2007年)*だ。Peterの語りによる一人称的な構成となっている。特別な撮影技術や機材を用いなくとも、一人称的な語りを軸にすることでまとまりを持った映像作品として表現することが可能になっている。*『PHIRO』(2008年)*は、美しい映像かつ、語りのないかたちで制作されている。映像には調査協力者のシャワーシーンが収録されており、そこから撮影者と協力者が親密な関係性だからこそ撮影できたものであることが伺える。

ほかにも*難民支援協会が公開しているPR映像*、大橋らが制作した『故郷［Home］』(2015年)、YouTubeと製作会社スコット・フリー・プロダクションズが手がけた*『Life In A Day』(2011年)*を鑑賞し、多種多様な制作事例を学んだ。いずれの手法においても〈アクセス〉が鍵になっており、撮影できるような調査協力者との二人称的なかかわりを築いていくことが大切であるとディスカッションが進められた。

後半は「被災地と仮の住まい」と題した、法政大学の岩佐明彦先生によるレクチャー。「仮設（応急仮設住宅）は‘Home’となりうるか」「被災地における‘Home’とは？」という問いのもと、応急仮設住宅（以下、仮設住宅）における人々の生活の工夫についての研究を紹介された。

岩佐先生が仮設住宅に注目するきっかけとなったのは、2004年に発生した新潟県中越地震だった。震災後に建設された5,000戸の仮設住宅は、家族の構成人数によって間取りに違いはあるものの、ほぼ同一の規格のものが用意された。入居後しばらくすると、より住みやすくするための工夫や改善が居住者によって施される地域もあれば、そのまま使われている地域もあることに気づいたという。そこからは、工夫のノウハウは近隣のなかでしか流通せず、偏在していることがわかった。そこで岩佐先生は、岩佐研究室の学生らとともに、改造のノウハウが流通するよう、ほかの仮設団地の状況を共有する場として「仮設カフェ」を実施。仮設カフェに設けられた仮設改造フォトギャラリーで、仮設住宅で写真に収められた「暮らしの工夫」を展示し、キャラバン方式でノウハウを追加、流通させることを試みた。そうした活動を続けるうちに岩佐先生自身のテーマが、「知恵の提供」から「知恵を共有する方法の提供」へと変わっていったという。「仮設住宅に住んでいる人のなかで情報が共有されることで、心地良く暮らせるようにしたい」と、情報共有を促すために*『仮設のトリセツ ——仮設住宅を住みこなすための方法——』*が生まれた。

仮設住宅に住む人々が、仮設住宅を住みやすくするという共通のテーマをきっかけにコミュニケーションが生まれ、住まいをカスタマイズしていくなかで生き甲斐や、仮設団地のなかで自分の役割を見つけることもある。居住環境へコミットメントすることによって前向きな姿勢が生まれ、回復していくのだと岩佐先生は話す。本当の意味で良い仮設住宅であるかは、退去時に決まるものであり、評価されるものは住居の質ではなく、入居者の回復の状態である。

震災復興の過程では、集落が再建され、同じ場所でも景色が上書きされていることが多い。異なる地域に集団移転する際に、実際に置かれていたもののパーツを用いてもとの住まいの風景を想起させる試みや、場所が変わっても記憶が継承されていく地域もある。しかし一方で、仮設住宅団地で築かれたつながりを保つために、復興住宅へグループで集団移動したいという要望が叶わなかったり、復興住宅に入居するも、後から高級タワーマンションが隣設され、景色が一変してしまったりするケースも。新しい復興住宅よりも、仮設住宅団地の方がよほど‘Home’だったのではと思わせることがあるという。

レクチャー終了後は参加者とのディスカッションの時間へ。 ひときわ盛り上がりを見せたのは「‘Home’の感覚をもたらす目に見えるものは何か」という議論だった。場所が変わってもものが散乱してくると‘Home’を感じると語る参加者がいる一方で、日常的な儀式やルーティンに着目する参加者もいた。毎朝コーヒーを飲むマグカップや、愛着を持っているものなど、‘Home’たらしめているものは案外些細なものではないだろうか。

第4回 2019年9月28日［土］

スタディへの思いを共有する

今回は、参加者一同が、スタディに参加することになったきっかけと今後どのような映像制作に取り組んでいきたいかを共有し、ディスカッションを行った。

それぞれが、スタディに参加することになったきっかけは、普段の生活や体験、育ってきた環境や家族からの影響など、バラエティ豊かで、それらを互いに知るだけでも、多様な生活世界があることの再認識へつながっていくようだった。参加者は年齢や職業も幅広く、外国にルーツを持つ人もいれば、同じ場所に住み続けている人もいる。ひとりひとり異なるバックグラウンドを持つが、共通して人の暮らしを調査することや'Home'に何かしら特別な思いを抱き、このスタディに足を運んでいることがわかる。

両親が海外へ移住したために始まったひとり暮らしをきっかけに、家族の特有な習慣に気づいた参加者は、「環境移行と住みこなし」について考えたいと話す。ほかにも、過去に家族の転勤による数々の移動経験を経て、自らの引っ越しを控えている現在、「自分にとっての故郷」を考えたい、新しい環境を'Home'と感じるまで、さまざまな要素を組み合わせながら取り巻く状況をつくっていく「実験」をしてみたいなど、移動や家族を含めた自分の生活環境への関心の高さが伺え、そうした関心の裏側には、参加者の現在にいたるまでの経験が色濃く反映されているようだった。

また、'Home'の感覚は何から得られるものなのかという問いを、アイデンティティと結びつけて掘り下げていくことも、ひとつの大きなテーマとして浮かび上がってきた。ある参加者は生まれの地にも、いま住んでいる地にもどこか馴染めない一方で、どちらに対しても'Home'と感じ、景色を見ると「帰ってきた」という感覚を抱いている。また、「留学先に'Home'のかけらを置いてきてしまったように感じる」と語る参加者は、東京で生まれ育ったが、留学をきっかけにアイデンティティの揺らぎを感じるようになったそうだ。「タワーマンションに住むことにコンプレックスを感じながらも、そこに帰るとホッとする自分がいる。機械的に見える都市のなかにも、住まいの工夫は実際にある」と語る参加者は、都市のなかの住まいの工夫を通じて、東京に住み、居心地の良さを覚える自分を肯定的にとらえたいと考えているという。

自分と関係を持たない第三者の暮らしへのアプローチの試みに関しても、活発な議論が行われた。そもそも家を持たない人々の'Home'観への興味から、「アドレスホッパー」についての調査を考えていたり、さまざまなものに対して自分で解釈し、主観性を持たせる瞬間（暮らしの工夫がされたものやする人）」をたくさん撮りたいという構想がある参加者も。東京に長く住むも、いまだどこか馴染めなさを感じているという参加者は、「ずっと東京に住み続けている人や、東京を愛し、東京を'Home'ととらえる人が描く東京の姿を見てみたい」とのこと。第三者への調査のなかでも「家」というひとつの場所に限定しない'Home'のとらえ方、表現方法や表現されたものへの関心も見られた。

プレゼンテーションを通じて、各自の経験や思いとともに少しずつ、'Home'の感覚が言語化されていき、終盤に向かうにつれてディスカッションはさらに盛り上がりを見せた。参加者からどこか語らずにはいられないような、表現せずにはいられないような熱っぽさが感じられ、同じスタディに参加する仲間をもっと知りたいという思いが湧き上がっていた。プライベートシェアハウスに住む参加者は、帰宅時に「帰ってきた」という感覚が薄く、シェアハウスのルールや誰かの存在、距離感によって'Home'への感覚が異なってくるかもしれないと共有した。また、何かの儀式やルーティンが'Home'のキーポイントになるという議論からは、「儀式やルーティンで使うものが動かせるのであれば、どこも'Home'になりうる。その儀式やルーティンが場所を選ぶなら、その場所が'Home'になるかもしれない」「状況や文脈が揺らいでも、自分の'Home'の感覚のもとがわかれば、確かなものになるはずだ。それはじっくり時間をかけたり、愛着を込めることで、それが自分のなかで確かなものに変化していく」という意見が出された。すでに存在している'Home'をどのようにとらえるかといったことから始まった議論は、'Home'を生み出すには、何が必要なのか、どうすれば良いのかという観点へ発展していった。

参加者のなかには、調査される立場を経験したことのある方もいた。調査に協力する間、調査の目的や、自分の何を理解してもらえているのか、詳細がわからず、疑問を抱えていたという。調査者と調査協力者が互いに理解を深めていくプロセスを、このスタディを通じて体験したいと語った。

第5回 2019年10月5日［土］

人の生活に根ざしたアプローチを学ぶ

トミトアーキテクチャの冨永美保さんと伊藤孝仁さんをお迎えし、レクチャーとディスカッションを行った。

トミトアーキテクチャは、これまで建築業界で主流だった「箱」としての建物を設計するだけではなく、日常をつぶさに観察し、人やまちとの関係性のなかでの建築の構想に取り組んでいる。「ただかたちにするのではなく、そのものの背景や関係性が反映されるような建築をしたい」と冨永さんは語る。今回は主に4つのプロジェクトについて、設計に着手するまでのプロセスを中心にお話しいただいた。

まずは、神奈川県足柄下郡の人口7,000人ほどの真鶴半島にある空き家を、ゲストハウス「真鶴出版2号店」に改修したプロジェクトについて。真鶴半島は「背戸道」と呼ばれる、家の裏口に面した路地が多く存在しているのが特徴的。背戸道がある建物は、ほかの建物との間隔が狭いため、すれ違う人たちは思わず会話を交わさずにはいられないという。実際にまちを歩くと、背戸道を軸にした生活単位を建築が支える、というよりは建築が背戸道に支えられるような感覚を抱いたというトミトアーキテクチャのふたり。「真鶴出版2号店」の近くにも多く存在する、この背戸道の距離感を建築に取り入れたかったとのこと。

背戸道を通る経験をデザインすることにこだわり、建築内部の展開図とは別にもうひとつ、真鶴背戸道の「風景展開図」を制作。背戸道を歩いた経験を連続スケッチとして細切れに描き、変えたいと思った場所に修正を入れつつ、これらふたつの図面をもとにアイディアを練っていった。そうして改修された「真鶴出版2号店」には、6つもの出入口がつくられ、道のように通り抜けることを体感できる空間が生まれた。

横浜市東ケ丘にて、築70年ほどの二軒長屋を地域拠点「CASACO（カサコ）」へと改修したプロジェクトは、依頼主からの「自分の家をNPOの活動拠点として、まちにひらいた場所をつくりたい」との依頼から始まった。はじめに、まちの人の声を聞き、関係性を築こうとワークショップを開催したが、住民はほとんど集まらず、失敗に終わってしまう。そこで「東ケ丘新聞」という、東ケ丘での出来事やCASACOでの活動をまとめたローカル新聞を作成して配布したところ、関心を持ってくれる人が少しずつ増えていったという。実際に住民の方々も改修工事に参加してもらおうと、解体した「ピンコロ石」を敷き詰めるワークショップも行った。「こうしてまちに住む方々と関係性を築くなかで、次第に東ケ丘の歴史について話を聞くことが多くなった」と語るふたりは、住民の習慣や行動を時間軸と地形の標高でマッピングした「出来事の地図」を作成。東ケ丘で起こった出来事や聞いた話を描き出し、時間軸に沿って次第に広がる出来事の地図は、まちの生態系を理解する試みであり、まちや人の動きを見えるようにすることで「ひらく」ことを実現する試みでもある。

また、千葉の市川市南行徳の一軒家をシェアハウスに改修するプロジェクトや、仙台特別養護老人ホームの庭を改修するプロジェクトについてもアイディアの構想段階を含むプロセスを中心に、話が展開された。トミトアーキテクチャのふたりは、建物をただ設計したりつくるだけではなく、立地や場所の成り立ち、まちと人々との関係性の構築も大切にしている。「建築はいままで強くつくるもの（構造的に強い・設計者の意図が反映された、付け入る隙がない完璧なもの）が主流だったけれど、かかわりや距離感、信頼関係に着目することで、これまでにはないつくり方が生まれる」と語った。

後半、大橋はSarah Pinkらによる書籍『*Making Homes: Ethnography and Design*』（*Bloomsbury Academic*、*2017年*）の一部を抜粋し、調査対象となる相手を知る手法を紹介したのち、それをもとにワークショップを行った。誰かの家を調査するということは、感覚的な環境を扱うことになる。面接のようなスタイルのインタビューだけでは、身体的・感覚的な経験、想像や願望についてまで語ってもらうのが難しいこともあるが、パフォーマティブな方法を組み合わせることによって、相手が話すきっかけを見つけるなど、感覚的な環境に対する内容も扱いやすくなる。協働的な作業を通じて、「生活世界」を一緒に見ていくことで、調査対象者自身も知らなかった一面をともに発見していくことができるという。

最後のワークショップのテーマは「身の回りのものをひとつ決め、一日のなかでそれに関連した自分の動きを書き出す」。参加者は4グループに分かれ、それぞれ「洗濯機」「電子レンジ」「寝床」「スマートフォン」を選定し、関連する自分たちの動きをホワイトボードに書き込んでいく。チーム内で質問し合いながら、それぞれの行動の背景にある思いに着目し、自分や相手の習慣をともに再発見していくことを目的として行った。

第6回 2019年10月26日［土］

デザインリサーチのアプローチを学ぶ

今回はデザインリサーチャーの水野大二郎先生をゲストに迎えて、「デザインリサーチ」についてのレクチャーを行った。

デザインリサーチは、個別具体的なものを対象に行われる設計のプロセスや、その際に生まれる創造性を研究の対象として取り出し、分析するという学問分野である。デザイナーの設計プロセスを体系化することから始まったが、より良いものをつくるためには、デザイナーが試作品をつくり、議論を重ねる必要があることがわかってきた。試作品をつくるにあたり、デザイナーがユーザーのニーズを適切に把握するため、ユーザーを調査することが求められる。そこで、文化人類学的調査法（エスノグラフィー）を用いて調査が行われるが、デザインにはスピードも求められるため、現在は、民族誌的な調査方法に準拠しながらも、より短時間で行えるよう、デザインリサーチ独自の調査方法を展開している。

デザインリサーチにおける調査では、調査協力者の生活世界の説明や、ほかの調査者の成果を解釈する（問いかける）ことがとても大切で、写真でとらえたものが何で、どういう意味があるのかを注釈できる力が求められる。しかし、目の前の〈あたりまえ〉を問い直すのは難しい。その難しさを少しでも解消するため、デザインリサーチによって「50の問い」という、ツールが開発された。こうしたツール化は、デザインリサーチとエスノグラフィーとの違いであり、ツールを開発することによって、うまく、早く、おもしろく調査を進めていくことを目指す。デザインリサーチは、ただ理解することではなく、そこから新しいデザインを生み出すための想像力を促進するために用いられている。

デザインリサーチの独自の調査手法には、ほかにも「人工物に注釈をつけていく分析方法（Artifact Analysis）」や「カルチュラルプローブ（Cultural Probe）」がある。また、近年はデザインリサーチの新しいアプローチとして、ビデオを用いてユーザーのストーリーを説明していく「デザイン・ドキュメンタリーズ（Design Documentaries）」と呼ばれるものがある。調査者とユーザーの関係性を写しながら、ユーザーの生活世界を切り取るという、ドキュメンタリー映像の手法による影響も受けている。

後半に大橋と水野先生が協働して制作した映像『Transition』（2019年）の上映を行った。水野先生が、妻のみえさんが妊娠中に病気と診断されたことをきっかけに、2年間撮影し続けた生活記録をもとにつくられたドキュメンタリー映像作品である。

2017年5月、臨月に入ったみえさんの体調が思わしくなく、検査を経て胃がんが発覚。そこから丸2年間の生活を、水野先生は映像や写真を用いてほぼ毎日記録を続けた。

2018年7月から大橋と水野先生による協働が始まった。ほぼ毎週インタビューを行い、写真・映像データや日記から水野先生の生活世界の文脈を理解するための調査に取り掛かり始めた。みえさんとのLINEの会話内容をはじめとする、携帯やパソコンのデータには、食べたいものや行きたいお店などについてのやりとりの痕跡が残っていた。また、水野先生自身は、みえさんの闘病中、大学ー病院ー家といった点から点への移動を繰り返す生活を続けていた。家族を取り巻く〈移動〉、そしてタイトルにもなっている、生活の〈移行〉にフォーカスされた、家族の関係性、水野先生とみえさん、息子の照くんの生きざまが、映像を通じてひしひしと伝わってくる。

水野先生が自身の生活世界の記録を始めたきっかけは、みえさんの病気のことを調べるうちに、〈もしも〉の状況を想定するようになったからだった。生まれてくる子どもに母親のことを伝えるために、たくさんデータを残そうと考えた。水野先生は、自身の体験を通じて、病も生活も、「すべての問題は解決できる」というような考え方から撤退し、複雑な問題とどう向き合い、少しずつ前に進んでいくかを考えていきたいと語った。記録を始めたのは、簡単に解決案を出すのではなく、複雑な問題と長く付き合う方法を考えるためでもあるのだ。

それぞれの映像をどんな思いで撮影したか、という質問も上がった。『Transition』は水野先生の撮影した映像が中心に使われている。撮影時には、後からほかの人にも見られる記録であることを意識している部分もあったが、何をどのように撮るかについて明確なルールを決めているわけではなかった。大橋とのインタビューセッションのなかで、概念的なテーマの中心として「移動と移行」を見出して、情報世界／心的世界にかかわらず、自分にとって「移動や移行」だと考えた対象に特に注目していたという。

第7回 2019年11月2日〔土〕

デジタル・ストーリーテリングを学ぶ

前半は大橋による映像エスノグラフィーについてのレクチャーを行った。後半は、映像制作に向けた進捗報告＆ディスカッションの時間となった。

映像エスノグラフィーとは、人々の生活世界、つまり意味の世界を知るためのアプローチのひとつであり、協働的につくるものである。かつ、研究のためのアプローチであるとした上で、映像エスノグラフィーと商業的なドキュメンタリー映画の違いを紹介した。映像エスノグラフィーは研究の目的で「協働的である」ということがより優先される。それに対し、ドキュメンタリー映画の場合、ジャーナリスティックな視点やビジュアルアートとしての面が優先されることが多い。最終的なアウトプットが映像作品であるという点は共通しているものの、目的は大きく異なるのだ。

上記のふたつに加え、今回は90年代にアメリカから始まったデジタル・ストーリーテリングを取り上げた。参考文献として小川明子『*デジタル・ストーリーテリング―声なき想いに物語を*』(リベルタ出版、2016年)を使いながら、具体的に説明した。

後半は、参加者がひとりひとりのプロジェクトのアイディアと現状報告を行う時間を設けた。それぞれの作品制作に向けて掲げているテーマが紹介され、現状の進捗、悩みを全員で共有した。

ある参加者の共有から「自分の母親や祖母とGoogle Mapを使って、特定の場所(故郷)について話をするというシーンがある」という話題が、ほかの参加者を巻き込むかたちで大きく展開した。参加者の多くが、自分の親戚や家族とGoogle Mapを使ってコミュニケーションをとった経験があるという。地図を通じて「過去」と「いま」との接続を可能とする貴重な機会であり、映像作品としてまとめるための方法についても意見交換があった。

「武蔵小杉」と「子ども」をキーワードとして挙げた参加者は、自身が育ったまちをテーマに高級なまちという認識を超えて、子どもの目線でまちを記録するプランを立てていた。タワーマンションの手入れの行き届いた庭で、子どもが思いっきり遊んでいる様子を目撃してから、このテーマが浮かんだそうだ。子どもを撮影することへのハードルに対し、ほかの参加者からは子ども自身に撮影してもらうことでクリアできないかとの提案が上がった。ほかにも撮影対象が自分で撮るという観点から、例えば男女や大人と子どもなど、撮影者の視点の違いのおもしろさについても話が膨らんだ。

映像を通して何を伝えたいのか、つまり「映像を撮影する意味」に関する悩みの共有もあった。カメラを向けようとしている対象は、12月に予定している引っ越しである。「引っ越しは自分にとって軽いもの」という思いがもともとあり、'Home'感を創り出すことができるものを扱いたい気持ちもあるものの、いまだにカメラを向ける対象の選定に悩んでいるそうだ。これに対し、大橋から、「『わからないから、撮ってみる』姿勢で調査をすると良い」とアドバイスがあった。カメラの力を借りて知る機会にすること、つまり最初から意味を考えずに撮影するということである。一定のルールを決めて撮影をし、振り返りのプロセスによって何かを理解したり、自分の考えていたことや大事にしていたことを発見することができるのではないだろうか。

「台湾人 in 東京」をテーマとする参加者は、スマートフォンの言語設定やホーム画面、アプリの種類などから、言語や出身地に対する考え方の違いはどのようにして起きるのかなどに関心を持って取り組んでいる。

「洗濯している隣人を撮影する」ことに取り組んでいる参加者もいた。1月までに引っ越しをする予定の隣人との協働制作の方法への迷いと、すでに撮影された映像が共有された。

また、東京から移動した経験のない人に「東京について語ってもらいたい」というアイディアを持つ参加者は、調査協力者とかかわる際には、言葉以外のものを媒介にすることを考えているという。散歩や料理など、色々なアイディアが挙がった。

「東京のなかでの移動」において、儀式のようなものがあるのだろうかということに焦点を当てた参加者は、20回以上引っ越しを経験している友人へのインタビューをしている。移動の経験のなかで「変わったもの」「変わらなかったもの」はどのようなものだったのか、など引っ越しの準備を30分で終えてしまうという友人と対話しながら、制作に取り組んでいる。

全体を通して大橋は、撮影するにあたり「最初から意味を考えすぎない」「編集のことを考えすぎない」ことを繰り返し参加者に伝えていた。撮影をしてみることで意味を発見し、それを起点としてリサーチ方法を随時アップデートすることも可能であると語った。

それぞれのフィールドへ向かう

今回のスタディは、参加者のプロジェクトの進捗についての個人面談の時間となった。すでに調査に入っている参加者がいる一方で、まだ調査に踏み込めていない参加者もいた。なかには、個人面談の前後をリサーチの時間として利用し、「ワクワクしています！もういまから楽しみでしょうがないです！！」と語る参加者もいた。

参加者の面談内容は共通して、「機材の選定」「調査方法」「振り返り」「表現方法」についてであった。調査を実施する際のカメラやマイクの選び方から、フィールドへ入ったときのカメラの設定や置き場、手ブレの問題など、実際に撮った映像とテーマを振り返りながら議論が進んだ。質感が表れるような映像を制作したいと考えている参加者は、一眼レフカメラと三脚を用いた撮影を計画していたが、調査協力者がカメラを気にしているためにやりづらさを感じていた。一方で、調査協力者がカメラに対して持っていた緊張感が、10分という短い時間で和らいだと語る参加者もいた。また、調査協力者の生活音をどのように映像に反映させるかについての相談も多かった。調査協力者と移動しながらリサーチを進める際に、距離が離れることによって音声が小さくなってしまうことや、音質に関する心配が共有された。これに対して大橋は、環境音の音量を落として、映像の背景音として使う提案を行うなど、参加者それぞれのテーマに合わせてアドバイスをした。音楽を使わない場合は、生活音の音質の重要性が強調されるなど、制作したい映像やリサーチのテーマによって、適切な機材は異なってくる。参加者が慎重になるポイントだ。

調査方法に関しては、調査協力者の人数に関する議論があった。調査協力者が複数いる場合はつまり、その分だけスケジュールを調整することが必要になる。参加者自身が時間を取れないときには、調査協力者が個人的にできるような調査方法をデザインすることが求められる。例えばビデオを撮ってもらい、絵や日記を書いてもらうような調査方法を採用する場合は、調査協力者自身の個性が反映されやすいと考えられるが、習慣化されていないことが負担となる可能性を考慮しておく必要がある。そのため、参加者は調査協力者と相談しながらデザインをすることを心がけておくことが重要事項となる。撮りたい場面を撮ることができなかった／うまく撮れなかったと悩む参加者に、大橋は「その場面が撮れなくても、後から再演してもらうことはできる。大切なのは参加者が調査協力者の生活にどれだけ近づき、どれだけ協働して表現の可能性を探索できるかである」と語った。自分の行動によって相手の行動が変わることを危惧する参加者もいるが、リサーチをすると決めた時点で協働関係は始まっている。そこを含めたふたりの関係性をも描き出すことにも、リサーチのおもしろさがある。

撮った動画データの一部が消えてしまった参加者は、そのつらい気持ちを共有し、大橋はデータのバックアップの重要性を強調した。また、振り返りの方法についても実際のフィールドノートを参照しながら紹介した。文字で振り返りができないときは、音声やビデオでジャーナルを記録することも可能である。蓄積していくフィールドノートは、撮った映像と振り返りのリンクづけの役割にもなり、リサーチ内容を整理するための大切な素材にもなっていく。

表現方法のイメージ像がすでにある参加者もいる一方で、まだどのように表現していくかを模索している参加者も多くいた。調査協力者が気持ちを表すときに積極的に使う「オノマトペ」をどう映像に反映させるか、匂いや感覚をどう表現に落とし込むかなど、自分を調査対象者に含めている参加者からは、自分の生活世界を映像に表現する難しさが共有された。また、映像制作にあたり、映像を見る人が映像に対して「感情的なつながり」を持てるかどうかも重要な視点である。対象から距離感のある場面が多い映像は、見る人も距離感を感じるという。調査協力者の生活世界に近づいていく調査者のように、見る人もその世界に没入できるような映像構成を念頭におくことも大切だ。

参加者によって、リサーチと映像制作へ抱く悩みはさまざまであった。調査のペース、調査協力者との関係性など、何ひとつ同じものはない。重要なのは、調査者が映像作品のなかでどんなストーリーを描き、見る人にどんなストーリーを読み取って欲しいのか。そして調査者と調査協力者が互いに納得感を持てるか。いよいよ参加者全員が映像制作の作業に入っていく。

それぞれのフィールドでの気づきを共有する

アムステルダムから帰国した大橋が、国際ドキュメンタリー・フェスティバル・アムステルダム（IDFA）に参加した感想を共有した後に、目的に応じた撮影方法と表現の技法について紹介した。後半は、参加者がこれまでの進捗と現状のアイディアを企画書にまとめ、全体に共有する時間を設けた。

大橋はIDFAにて、第6回活動日（→PP.26-27）のゲストスピーカーである水野大二郎先生と協働制作した映像『Transition』（2019年）を上映した。Q＆Aセッションでは、ほかに上映された映像作品と同様に、「作品の始まり」について問われたという。これを踏まえて大橋は「作品のテーマや対象を問わず、どのようにして始まったのかを考えることが大切である。特に、リサーチの対象に出会ったときの感覚を大切にするべきだということを改めて感じた」と語った。制作してきた作品が増えるほど、プロとしての知識は成熟していくが、一方で、あまり考えずに同じ方法で取り組んでしまいがちだ。「どうしてそれをやりたいのか」「どうしてそうでなければならないのか」と「新人」だったときの感覚を忘れずにいることが重要である。また、大橋は「Why so shy? You have cameras. Trust more in cinema and the image as a medium for exploring and understanding the world.」というIDFA 2019の審査員の言葉を紹介した。対象との関係性を重んじることはもちろん欠かせないが、それによって何もできなくなってしまうのはもったいないことだという。リスクを冒すほど価値のある対象・テーマであるからこそ、カメラによってつくり出される世界を信じて、冒険することが大事だ。

大橋は撮影技法を紹介しつつ、新たな撮影が必須ではないことを、いくつかの作品を通して伝えた。『Scissors』（2016年）は、過去に撮影された画像やイメージなどの素材のみで、自分の家族の歴史を伝える作品であった。また、『Polyfoto』（2015年）は48枚の連写された証明写真だけで制作された映像作品である。大事なのは、固定された技法にとらわれることではなく、リサーチを経て、メッセージを一番伝えられる方法を自ら模索していく姿勢である。

後半では、参加者が作成した企画書をもとに発表し、ディスカッションを行った。調査協力者と自分の関係性を伝えたいと考えているが、どのような切り口で語るべきかがわからないと悩む参加者もいた。自分も映像に出てくるような構図にするのか、呼びかけている声だけを入れるのか。関係性を描こうとしたときの課題を感じながらも、それに挑戦しようと撮影した素材を見返す日々が続いているという。大橋はこれに対し、「素材を撮影しているのは調査者自身であるから、自身が映像に出ずとも自分の感覚は必ず反映される」とし、それを映像のなかでわかりやすいかたちで語るのか、それとも映像を上映する場で自分の存在を表現するのか、さまざまなやり方が考えられるため、納得する表現方法をとるようアドバイスをした。ある参加者は調査協力者とその家族とともに親の誕生日を祝う場面に居合わせたが、「私がここにいていいのか？」と、自分がそこにいることに違和感を感じていたという。これに対して大橋は、違和感は健全な反応であるとし、違和感があることを前提として、調査者が存在を消し一方的に調査するのではなく、この機会を通じて考えたこともなかったようなことをともに考え、意味づけをしていく過程が大事であると語った。

リサーチを通じて、参加者は調査協力者のことだけではなく、自分自身への理解も深まっているようであった。ある参加者は、調査協力者と自分の共通点や相違点、カメラに写った自分の振る舞いが場所によって異なることに気づいたという。いままで自分を語ることを拒み続けてきた参加者は、調査協力者と自身を重ねていることに気づき、調査協力者を語るためには、自分を語らざるを得ないような感覚を抱いている、と語った。もうすぐ卒業をする予定の留学生は、リサーチが自分を考えるきっかけにもなり、母国に帰るにあたり、日本での‘Home’の感覚を薄めようとしている自分がいることに気づいたことを共有した。

自分の家族を対象としてリサーチをしている参加者は、リサーチを通じて家族の知らなかった一面を知ったことを共有した。ときに冷静ではいられなくなるほどショッキングな事実を知ることにもなったが、相手の空間に入れたことに対して、ソワソワやドキドキを感じているという。

リサーチを重ねるにつれ、調査者が抱く悩みも少しずつ増えてきている。何を伝えたいのか、どのように表現するのか。調査協力者との関係性を築くなかで模索しながら、自分自身とも向き合う時期を迎えているようだ。

第10回 2019年12月21日〔土〕

個人の「つくる」を互いに支える

今後のスケジュールの確認と編集方法の確認を行った後、個人面談と参加者がそれぞれ作業をする時間を設けた。1月にはプロトタイプの上映会を行う予定である。少しずつ追い込みをかけていく時期だ。

制作する映像の長さに指定はないが、映像制作の際には「短く」つくることを心がけると良い。映像が長くなると説明的になったり、冗長になったりして、鑑賞者が想像する余白が失われてしまう可能性があるからだ。鑑賞者が「もう少し見たかった」「あれはなんだったのだろう」と思えるような映像を目指し、制作に取り組むことが大切である。また、大橋は制作途中に映像作品を他者に見せる重要性も語った。客観的な視点を取り込むことで、もっと洗練された映像作品になっていくという。技術的な注意点のほかに、肖像権・著作権の問題についても取り上げた。

映像作品全体を通しては、伝えたいストーリー／ストラクチャーを見つけることが重要である。まずは撮影した素材をバックアップし、破損しているデータの有無を確認する。場合によっては修復や代替、撮り直しとなる可能性もあるため、早めに確認をする必要がある。素材リストを用いて素材の管理を行い、インタビューをしている場合は、文字起こしを行う。素材が集まってくると、憶えているつもりでも忘れてしまう可能性が生じるが、そこにこそ大事なポイントがあるかもしれない。データの振り返りを行った後は、いよいよストーリーを見つける作業に入る。「映像作品を通じて伝えたいことは何か」を念頭におき、それを伝えるための素材と表現方法を選んでいく。ストーリー／ストラクチャーを見つける方法として、大橋は『*Documentary Filmmaking : A Contemporary Field Guide*』(2010年)を用いていくつか紹介した。

参加者が作業をする時間では、これまでの10回の活動を通して築かれてきた参加者同士の信頼関係が垣間見える場面が多くあった。編集ソフトに関して相談し合い、撮った素材の映像を見せ合う。参加者同士で調査し合っている人もいる。参加者とそれぞれの調査協力者との間でだけではない。このスタディのなかでも協働関係が生まれている。

第11回 2020年1月11日［土］

映像作品（プロトタイプ）をみんなで観る・振り返る

活動日の最終回。今回は11人の参加者が制作した映像作品のプロトタイプを上映し、ディスカッションを行った。調査協力者らを招いて開催する予定の上映会に向けて、これまでの過程を振り返り、映像作品の質をさらに磨き上げていくための時間となった。

リサーチと映像編集のなかで、調査協力者との協働を通して、自分自身を振り返るきっかけを得たと語る参加者が多くいた。スタディ3の参加者とその家族についてリサーチを行った参加者は、自分の移動の経験から東京に長く住んでいる人に関心を抱いていた。調査協力者とその家族をリサーチするなかで、人がふつうに生活していく「あたりまえ」の大事さを実感し、結果として自分と深く向き合う経験になったという。これまでのリサーチと編集を振り返り、彼女は「リサーチャーとしては幼かった。もっとやれたかな」と語り、どうしても自分が気になったことに対して反応してしまい、その背景や理由を聞いてしまう自分がいたことを共有した。一方で調査協力者は、「自分があたりまえだと感じていたことに対して、調査者が反応していたことに驚いた」と語り、自分が言語化していないけど、大切にしていたことを認識したと話した。リサーチを通じて、調査者と調査協力者のどちらにもその人なりの発見があったことがわかった。

また、協働関係を意識したリサーチを進めた参加者のなかにはこのような体験があった。リサーチと編集作業の全体を通して「協働的につくる」ことを最も意識したという参加者は、映像に直接的には現れないようなリサーチのなかで、相手の思考プロセスがわかるようになったのがおもしろかったと語った。協力者に映像を見せたときにも「何も違和感がない」と言ってくれたことを共有し、協働関係について振り返った。

調査協力者とはもともとつながりがあったという参加者は、協力者の生活が映像からあぶり出てくるように意識したことを共有。映像編集の段階では協力者とまだ協働関係になりきれていないため、映像作品のプロトタイプを協力者にも見せてから再度編集を行う予定だという。

リサーチを経て、調査協力者との距離感を再認識した参加者も多くいた。自分を語ることにためらいを感じていた参加者は、思い切って自分の‘Home’観を考えるための映像作品を制作した。これをきっかけに、これまで実家に対して抱いた感覚が変わり、肩の力を抜いて実家に帰れるようになったことで、実家との距離感が少し近くなったように感じたという。

自分の祖父母をリサーチした参加者は「撮影しているときは見えなかったが、素材を振り返るときに気づくことがたくさんあった」とし、編集のプロセスを通じて、家族との関係性や歴史を振り返ることができたと語った。また、普段離れて暮らしている祖父をリサーチしたもうひとりの参加者は、一緒に住んでいたら撮れない映像ばかりだったとし、ある程度の距離感があったからこそ、気づけたことがあった、と振り返った。彼女は自分の実家自体が‘Home’というよりも、これからも祖父と一緒に関係性を築くプロセス自体が‘Home’であると語った。

それぞれ上映したプロトタイプに対し、参加者が自由に質問や発言をするかたちでディスカッションが展開していったが、ひとつの映像作品に3つの音源を組み込んでいる参加者に対しては、「どのような基準で音楽を選んでいるか」という質問が上がった。彼女は複数人を同時にリサーチし、調査協力者が過ごしているいまの生活と自分が経験したことを重ね合わせて、時系列的に映像を制作していた。映像が表現している時期ごとに音楽を使い分けている一方で、すでに頭にあるイメージと重なるように音楽を選んでから、それに合わせてカットを考えることもあったという。イラストを用いた表現を考えている参加者に対しては、映像から伝わる躍動感がイラストになったことで消えてしまわないか、という声があった。

プロトタイプの共有とディスカッションを通じて、参加者それぞれに新たな発見と課題が生まれただろう。まだ思考の途中で、プロトタイプが完成していない参加者もいる。リサーチでの発見、伝えたいストーリー、表現方法、協働関係。考えなければならないことはたくさんある。

スタディ共有会 2020年1月19日［日］

多様な世代、背景の参加者がいる学びの場

2019年度の東京プロジェクトスタディの３チームが一堂に会して、約半年間試行してきたことの「共有会」を行った。

各スタディは30分ほどの時間を振り分けられ、スタディ1「続・東京でつくるということ ―わたしとアートプロジェクトとの距離を記述する」とスタディ２「東京彫刻計画 ―2027年ミュンスターへの旅」の発表の後に、スタディ3の参加者とスタッフ全員でステージに上がった。

スタディ3では、流動的な東京において、どのように'Home'というものが築かれ、培われているのかをリサーチし、最終的にプロトタイプの映像作品を制作した。活動日では、自分なりの'Home'という概念のとらえ方や、調査協力者との協働関係の築き方を探りながら実践につなげた。

共有会は、毎回の活動日で実施していたという「チェックイン」が参加者全員で行われた。「チェックイン」とは、活動日の冒頭での挨拶を兼ねているもので、全員が同じお題に答えていくものだ。回を重ねるごとに参加者の個性やその人の日常が垣間見えるようになり、他者の生活をリサーチする実践の一環として、気づけばスタディ3の名物コーナーとなっていた。共有会での「チェックイン」のお題は、「このスタディに参加していなかったら、やらなかったであろうこと」。

どの参加者も、調査協力者との関係性のなかで自分自身を振り返り、自分の居場所をつくりながら'Home'についての手がかりを見つけていたことが伺えた。大橋は、活動日でもゲストとして招いた加藤文俊さんが、人々の日常生活が展開される現場でのフィールドワークと概念化を行うコンセプトワークの間を橋渡しするラボラトリーワークの重要性とそのあり方について議論したことを参考に、「スタディ」を振り返った。「スタディ」は、多様な世代、背景の参加者が集まって、半年間かけて同じテーマに取り組み、同じ立場で学ぶ貴重でおもしろい「ラボラトリーワーク」の場になっていたのではないかということである。大学のゼミやカルチャースクールといった場との共通点を見出しつつも、世代や属性が近い人々で構成されがちなそれらの場とは違う、「スタディ」ならではの学びの場の特徴を、「ラボラトリーワーク」というキーワードを使いながら語った。

Q このスタディに参加していなかったら、やらなかったであろうことは？

日本に来て早4年。2ヶ月に1回の頻度で台北と東京を行ったり来たりしている。日々モヤモヤする気持ちを抱いていた自分にとって、アイデンティティや文化、家族をテーマに、ひとつの作品が作れたことは非常に大きな財産。特に、自分に焦点を置かず、調査協力者を対象に作品を作ることはこのスタディに参加していなければやらなかったことだと思う。

鄭禹晨

撮影のために、ちゃんとした機材を買おうと思って秋葉原に行った。まだ自分の撮ろうとしている映像を悩んでいた時期だったが、「イメージが大事ですよ」と電気屋の店員さんが機材の紹介だけではなく、親身になって作品のことまで入り込んでアドバイスしてくれた。このスタディに参加しなければ、その店員さんには出会わなかったと思う。

橋本晴加

日記を書くこと。今回の撮影において、リサーチ対象者との共同作業を大切にしていた。彼女への理解を深めるために日記を書いてもらうことをお願いしたので、自分も生活を振り返るための日記を書いて彼女に送るようになった。生活を見つめ直すきっかけになった。

神野真実

普段は文章を書く仕事をしているが、今回はあえて違うことをやりたいと思ってスタディ3に参加した。色々模索したり、友人を巻き込んだりして試してみたが、結局自分がつくりやすいネタで自撮りなんかした。普段なら絶対ありえないことをやってしまったという機会だったので楽しかった。

小島和子

アパートの隣に住むおばちゃんを撮影することと、それに伴っておばちゃんのお家に入れてもらったこと。いままで、'Home'の定義について考えてはいたが、このスタディの活動を通じて自分のなかの'Home'という概念が拡大された。

橋本隆史

まず、この頻度でアーツ千代田3331に来ていなかった（笑）。普段から食べものの写真を撮っているが、初めて他人に見られる前提で写真と映像を撮るようになった。映像作品のなかで、人生で16回引っ越してきた自分なりの'Home'の定義を解釈しているので、ぜひ見てください。

田中翔貴

久しぶりに映像の編集をした。昔はiMovieを使っていて、Final Cutになって、このスタディに参加してAdobe Premiereになった。調査対象者は在日韓国人二世である東京藝術大学絵画科油画専攻の4年生。アトリエにも入らせてもらって、密着して撮った。今度は彼女のお母さんがキムチをつくる会を取材しに行くことになったので、これからまた素材が増えてしまう。

高山伸夫

作品ノート

各参加者が、映像作品の制作にあたって
何に関心を持ち調査を始めたか、
どのような協働関係が生じ、何を表現できたか、
リサーチした内容を紹介します。

GONDOLA

神野真実 | 11分18秒

定住をあたりまえとしない現代、人々はどのように居場所をつくるのか。日本各地を移り住んできた女性の「11回目の転居」。引っ越しのたびに、人やまちとの関係性をつくり上げるなかで見えてきた彼女にとっての'Home'とは。

人生で起こるさまざまな出来事をきっかけに暮らしを新たにする人は、どのように'Home'をつくるのだろうか。本作品では、就職を機に10回の転居を経験した女性の11回目の引っ越しに注目し、彼女にとっての'Home'の意味やそのつくり方について理解を試みた。

引っ越しを繰り返すなかでも引き継がれているものや振る舞い、大切にしている考え方について理解するため、カルチュラルプローブとして以下2つの内容を依頼した。
①「捨て(られ)ないもの」の写真：何度引っ越しをしても捨てないもの、新居(元祖父母宅)にあり捨てられなかった／引き継ごうと考えているものを撮影してもらった。② 引っ越し日誌：住まいの環境を整えるために行ったことや、引っ越し期間中に起きた出来事、その際の心境について、予め描いてもらった新居の図面を下敷きに書き込んでもらった。また、彼女の旧居と新居において計2日間、これまでの引っ越し理由や当時の状況、「捨て(られ)ないもの」の写真、引っ越し日誌についてインタビューした。当日は写真と動画を撮影し、必要に応じてLINEで追加質問を行い、関連する写真を提出してもらった。

リサーチのなかで印象的だったのは、家財の多くがかつてのご近所さんからの貰い物であったことや、現在の彼女の暮らしを支えるご近所さんが、引っ越し日誌に度々登場することであった。引っ越しを繰り返すなかで、「人はひとりでは暮らせない」ことを痛感した彼女にとっての'Home'とは、物理的なものや環境ではなく、人に頼り／人から頼られる関係性のなかに存在することを理解した。作品タイトル『GONDOLA』は、「たまたま乗り合わせた人々と、頼り頼られる関係性を築きつつ、ほしい未来を手ずからたぐりよせる」という彼女の生き方を体現するものである。

OCEAN

松尾葉奈 | 4分32秒 | 縁もゆかりもない土地に、自らの意思で来た人が築く'Home'を探る。留学の経験を共有しているふたりが調査者／調査対象者というポジションを越えて、共同で制作した映像作品。

私の'Home'はどこにあるのだろう。1年間のフィンランド留学から、生まれてからずっと住んでいる東京に戻ってきた私は、自分の一部をどこかに置いてきた気がして、この疑問をずっと抱えていた。そんなときに出会ったNueyは、東京の大学に進学するためタイからやってきた、同い年の女の子だ。住んだことがあるわけでもなく、親戚や知人がいるわけでもない日本に、自分の意思で住むことを決めた。日本語は勉強中だ。それでも、一生懸命に自分らしく生きているNueyと話し、考えを聞くうちに、フィンランドにいた私を少しだけ垣間見た。

タイ人の彼女と日本人の私は、会えばだいたい英語で話し、ちょっと日本語も混ぜる。色々な国の文化や考えが合わさるNueyにインタビューをして、家族や国や言葉に対するNueyの想いを聞いた。そのなかで、私のなかの根なし草のような孤独感が、温かく肯定された気がした。

Nueyは、独特のセンスで美しいフィルム写真を撮る。その写真たちは、彼女の人生や人となりを綺麗に表現していると思う。また、Nueyが切り取りたいと思った瞬間や場所、人々が時を超えて、表現として見える。その光の感覚や撮ったときの記憶を振り返りながら、Nueyがいままで考えてきた'Home'について話してもらった。

今回の作品は、新しい関係から生まれたふたりの作品だと思う。このプロジェクトを通して、Nueyが私の大切な友人になった。そして、彼女を理解するプロセスとしてこの作品ができたと思う。Nueyの写真とナレーションを使っているけれど、私というフィルターを通してできた作品だ。これは私を表現する作品でもあるから。東京という大きな海で漂うふたりが、出会って築いた関係性からできた作品だと思う。

神野家の人びと ～ Home in ‘Tokyo’ ～

初田美紀子

7分58秒

東京出身、東京育ち、現在も東京に住み続ける人をリサーチすることで、そこから映し出される「東京」を知り、感じてみる。住むという行為が、どのように決定され営まれるか、考える示唆となることも期待する。

日本の首都＝「東京」。東京は、世界から見ても大都市である。その大都市「東京」という存在は、地方に生まれ、地方で育った者にとっては、非常に大きな存在である。幼き頃から、テレビや報道で、絶えず東京の名所旧跡の画像が映し出され、ニュースの場面として映像が流れてくる。名古屋出身の私は、東京は胸躍る地域と認識し、いつかその場所に住んでみようと小学生の頃から考えていたように思う。現在、東京に住み、名古屋で生活した年数より長くなった東京だが、実のところ、「東京人」というイメージが薄いことに気づいている。

仮に「東京人」という人々がいるならば、東京で生まれて育った彼らはどのように暮らしているのか、または「東京人」として東京に対する意識を今回のリサーチのテーマに重点を置いた。調査協力者は、20代の若者3人（兄夫婦と妹）という構成である。実家のご両親がアメリカ駐在となり、実家は妹が守る。そして、定期的に3人は集い、兄夫婦が実家に訪ねて夕飯をともにしている。その仲睦まじい3人に、同様の質問を投げかけ、各々にインタビューを行った。

インタビューのみならず、アメリカ滞在中のご両親にオンラインで話したり、家族の様子を知るなかで、「現在、自分が住んでいるところ」が「此処」である、という普遍的な家族のあり方が映し出された。また、家族がいる場所としての安心感が「此処に」確かにあることも垣間見られた。住む場所を選んだ結果としての「東京」ではなく、自分が生まれて育った場所、そして、そのままを受け入れた生活の結果としての「東京」かもしれない。映像からは、インタビューの回答に考え込んでしまう場面や、言葉と言葉の「間」から、自分の居場所に疑問を抱くことが少なかった現実が映し出され、逆に強調されているようにも感じられる。

お隣さん

橋本隆史 | 14分23秒

私の住むアパートの隣の部屋には、おばちゃんがひとりで暮らしている。玄関先で洗濯物を干していると顔を合わせるようになり、次第に会話をするようになった。しかしアパートの解体が決定し、引っ越しすることが決まっている。

夏にアパートの取り壊しが決まり、「引っ越し」という選択をしなければならなくなった隣の住人。自ら選択した移動ではないことや、引っ越しという持ち物や生活が大きく変化する転換期には、お隣さんのこだわりや生活模様が垣間見れるのではないかと考えた。そんな引っ越しを通しての生活を映像として記録することで、お隣さんの'Home'が見えてくるのではと思って撮影した。

また、洗濯物から始まったお隣さんとの関係性がおもしろいと思った。それは1棟4部屋しかなく、そのうちの2階の2部屋が私とお隣さんであったこと、また玄関先に洗濯物が干せるちょうどいい柵があることで(実際は干すところではない)、洗濯のときにお互い顔を合わせるようになり、次第に会話をするようになったことから始まった。この関係性は、そんなアパートならではの小さな空間が提供してくれたものだと思う。私は、お隣さんがその柵を物干しとして使いこなす様子や、洗濯から始まった私との関係性にも'Home'が見えてくる気がする。

記録に関しては、洗濯の風景、近所の中華料理屋、部屋のなかなど生活空間を背景に、普段の会話から出てくる、気になったワードに着目して質問を投げ、インタビュー形式で撮影した。その素材を繋ぎ合わせて映像にするなかで、言葉ではこぼれ落ちてしまうような、お隣さんとの関係性、人柄や何気ない仕草、話の言い回しや言葉の間、アパートの佇まいや空気感など、それぞれの要素から立ち上がるお隣さんの'Home'を改めて感じることができた。

「上書き」された‘Home’をめぐって

小島和子 | 5分3秒

「街に暮らす」軽やかな感覚を表現できたらおもしろいかもしれない、というイメージで日常の撮影に初挑戦することから始まり、思いがけず実家で自分の子ども時代と向き合うことにもなった。浮遊する‘Home’感がテーマ。

◉当初の狙いやリサーチのプロセス

どうもひとりでは広がりが見い出せそうになく、東京ネイティブではない友人を巻き込むことに。友人にとっての東京は、それまで聞いていた以上に「仮住まい」のようだったが、思いのほか東北の実家に‘Home’感を抱いているらしいことを知る。ただし、東日本大震災を経ていることもあり、その感覚は子ども時代からのそれではなく、「上書き」されたものだと。

おもしろいキーワードだからどこかに生かそうと思いつつ、「人の実家の話を入れるのに、自分の実家に触れないってどうよ？」と久々に親元へ。すると、とっくに処分済みだと思っていた子ども時代の痕跡がざくざく。「あれー？」と思いながら、結局実家のシーンもたくさん使うことにした。要は、なんだか迷走してしまった！ということ。ふーっ。

◉映像という表現について

日ごろの仕事では「わかりやすさ」重視で、つい説明的になってしまいがち。今回は、見る人の「余白」を奪わないよう、グッと堪えてみたつもりだ。おかげでナレーションがポエムになってしまった！映像には等身大の自分のなにがしらが表れたとは思うが、実際には何が「伝わる」のか？不慣れな表現を試みて、いつもと違う筋肉を使った感触だけはあるが。心地良い疲労感とともに。

◉おまけ——ふと感じたこと

ひとり暮らしで老齢の親のことがちょっと気になりつつ、どうにもいい距離感が掴めなかったのが確実に変わった。‘Home’というお題が常に念頭にある数カ月で、逆に肩の力が抜けた感じ。気になるなら顔出せば？というだけのことかと。

Reflection

ピッチャー・スパンタリダー | 8分18秒

日本を選んだ私たち留学生は、ここで居場所をつくっていくことに対してそれぞれ考えや感じ方を持っている。この作品は、その異なる部分と共感できる部分を映した、3人の物語だ。

2019年、インドネシア人のヌルールとシンガポール人のレックと出会った。彼らは2018年に入学したばかりで、日本を新鮮な目で見ている。友達をつくり、日本語を学び、東京や神奈川、日本中を旅行している。彼らを見ると、過去の自分が写されているようだ。共感できることがたくさんある一方、彼らも自分なりにぞれぞれの可能性を発見している。私はもうすぐ次のステップに行くことが決まったが、彼らから学べることもまだたくさんある気がした。

カルチュラルプローブというリサーチ手法として彼らに「写ルンです」を渡して、「自分の心地良い場所や瞬間などを撮ってください」と依頼した。返ってきたカメラを現像し、撮った写真について一枚一枚語ってもらった。また、ヌルールとレックには、もともと持っているビデオも見せてもらった。SNSに投稿していた写真や動画からも、彼らの性格を垣間見ることができた。

「写ルンです」で撮影したフィルム写真、彼らの生活が映された映像と彼ら自身が撮った映像。色々なメディアを通して集まったビジュアルの情報から留学生が持つひとつの日本への視点が見えるのだろうか。

全員のインタビューを通して共通しているのは、彼らは新しい場所に慣れるために、ファーストステップとしては人からではなく、自分で周りから馴染んでいくことが大事だとわかった。東南アジアから来た私たちは日本にいることから得た自由に非常に惹かれて、散歩が好きになり、自分の近所をよく歩きまわっている。次は自分と共感できる、大好きな人を惹き付ける。3人のなかで共通していることだ。この作品はこれまで辿ってきた私の4年間と彼らの生活を交互に繰り返し、ひとつひとつのピースからひとりひとりの道を想像させる映像を目指している。

東京の子ども

西井彩 | 3分44秒

都会で育つ子どもたちは、マンションのなかであっても創造力を発揮してのびのびと遊びまわっている。子どもたちと一緒に走りまわって遊ぶことで、都会の住宅街で遊ぶ彼らの姿を近距離で観察できた。

「都会の子どもはのびのび遊べなくてかわいそう」という同情の言葉を耳にしたことがある。都会育ちの私は、「のびのび」と遊べなかったために何か大切な感性が欠如した大人になってしまっているのだろうか。そんな負い目を抱えて生きてきた。しかし自分の幼少期を思い出せば、狭い公園でもマンションのなかでも、自分たちで新しい遊びを考案しては毎日息を切らして走りまわっていた。「のびのび」できていなかったとは思えない。都会育ちの負い目には、なんの根拠もない。都会でも子どもは工夫を凝らしてのびのびと遊びまわることができるはずだ。その仮説のもと、実際に都会で遊びまわる子どもたちの様子を観察した。

3回にわたって子どもたちと一緒に遊んだ。マンションや近所の公園でのおにごっこ、だるまさんがころんだ、かけっこ、どんじゃんけんにラプンツェルごっこ。私も全力で走りまわった。エレベーターや携帯電話を使いこなして遊びまわる子どもたちの姿を見て、山に囲まれているかコンクリートに囲まれているかは関係なく、子どもはどこであっても創造力を発揮して、状況を最大限に活かして遊びまわるのだと実感した。

一緒に走り、遊びまわることで、都会の住宅街で声を上げて楽しそうに笑う子どもたちの様子を近距離で観察することができた。iPhoneのカメラを使って撮影をしたことで、大きな抵抗なく子どもたちに溶け込むことができたと思う。今回はマンション内でのおにごっこに着目し、映像にまとめた。また、子どもたちの姿を実写ではなくイラストで表現することによって、観察者である私自身の幼少期と重ねて鑑賞できる映像になった。

このリサーチが、かつて都会の子どもだった大人たちや、いままさに都会の子どもを育てる大人たちの希望となることを願っている。

her fragments

高山伸夫 | 10分00秒

東京に出生の起点を持つ在日韓国人二世イェジ・セイ・リーさんにとって、いま、考え得る'Home'とは何なのか。東京藝術大学美術学部の卒業制作に奔走する彼女の日常を断片的に集積することでその一端をとらえる。

当初、東京生まれの韓国人で、韓国でも日本でも参政権のない自らの状況にイェジさんはある種のストレスフルな感情を抱いているのではないかと推測していた。日本に生まれ育ちながらも日本人ではないという、どこにも属せないようなマージナルな立ち位置。そんなものが彼女をアートに向かわせているのではないかと考えていた。

ところが、実際にインタビューや撮影を重ねてみると、違う印象を持つようになった。自分のルーツを知りたいといった根源的な欲求が下部構造として彼女に通底していることは確かだろうが、もっと前向きな意思を強く感じるのだ。彼女は、バスケットボールに励んできたアスリートであり、多くの時間を山手線の内側エリアで過ごしてきた都会っ子であり、世界を気軽に旅する現代っ子である。そして、アーティストである。これらの多様な側面を力強く歩んでいて彼女が足早に歩く姿や自転車を乗りこなす姿は、そうした彼女の意思を端的に表しているように思えた。

彼女から預かった韓国短期滞在中の膨大な写真群を眺めていると、そこには日本にはない色使いや文様があった。伝統的な建物などではその傾向は顕著だ。それは、まさに彼女の画のなかに現れる集積性(密度高く現れるモチーフや色の繰り返し)のルーツなのではないか。

彼女にとって'Home'とは何か。それは「彼女自身」だろうと思う。国やコミュニティや共同体に自らを預けることのできない感覚だ。そうした感覚を秘めているとすれば、自ずと自分自身の内なる場所に'Home'が存在せざるを得ないのではないか。それゆえ自らを形づくっているものに対する深い愛情も強く感じる。それが今回のテーマに対する、今のところの朧気な回答である。

人間的Home　Home的人間

田中翔貴

4分14秒

'Home' にはひとつの定義がなく、人によって解釈は異なる。具体と抽象の両面を持ち、私に移り行く。'Home' とは別れがなく、移動した先に出会いともに時間を過ごしていく。

無意識なものに、意識を傾けることで映像表現ができた。私は転勤族で、小さい頃から移動を多々経験し、最近の引っ越しは16回目だった。大人になったいま、「ここが私の 'Home' だ」という感覚は何によってもたらされるのか気になり、リサーチを始めた。直接的に 'Home' を構成するものは、人生のなかでの引っ越しの経験が特に影響が大きく、「場所やその空間」という物理的に目に見えるものとして、'Home' が構成されるのではないかと考えていた。しかしリサーチをしていくなかで、目に見えないものへの意識へと移り変わっていった。

引っ越しをするたびに、自分の住まいづくりのために貯め込んだ「もの」の取捨選択が始まる。「いるもの」、「いらないもの」、「わからないもの」の三つに分けて、「いらないもの」以外は、次の移動先に持っていく。ひとりで移動をするようになってから、実家に自分のものは一切残さず移動していた。しかし、最近の引っ越しでは、移動するスパンが短くなり、身軽に動きたいという欲求が抑えられなかったので、断捨離を始め、不要な荷物は実家に送ることにした。その結果残ったものを、いま買えないものに限定してピックアップすると、昔使用していた携帯電話だけが残った。その「もの」へと意識を傾けると、妙な安心感が宿る。

いまは使用せず「もの」としての機能は全く果たさないが、精神的な機能は働いている。これは成長しても移動しながら常に身につけていたものであり、その当時の記憶を蘇らせる装置であるからだろう。この携帯電話と自分との間に特別なものがある。物理的な距離としての「空間」とともに過ごしてきた「時間」だ。これらが重なり合い、私自身に共有されたときの安心感を持って、初めて 'Home' という感覚は生み出されるのだ。

鏡のまえで　-flow line-

橋本晴加

8分42秒

自分の軸、拠り所のようなものが揺らいでいる人が、どうやって軸をつくっていくのか。東京でひとり暮らしをしている「私」と実家の福島で暮らしている「祖父」のことを記録しながら、‘Home’の輪郭はどう定めるのかを問いかける。

「私」は東京でひとり暮らしをしていて、実家の福島では祖母の病気で入院という変化が起こった。それによって、「祖父」は自分の生活の軸だったものや拠り所が揺らいだ。一方で、「私」も、大学を辞めてからぼんやりとしていながら、「これから何をして生きていくのか？　福島に帰ったほうがいいのではないか？」といった問いに直面した。「私」が東京から福島へ行き「祖父」の生活を撮り、自問自答をしながらまた東京へと戻る。

福島パートでは、「私」が何度かの帰省で「祖父」と時間を過ごし、インタビューや質問も交えつつその生活風景を撮った。「祖父」はあまり話す人ではないので、一緒に散歩や買い物をしながら、孫である「私」と会話しているように質問した。物理的にも心理的にもなるべく近づけるよう、明るく自然なアプローチを心がけた。ネガティブな変化のなかを生きている人から、「私」の生活にもつながるような生きこなし方を映したかった。「祖父」は、自身の体調の変化もありながら、生活習慣を変えたり、新しい生活のイベントを増やしたりしていた。

東京パートでは、「私」の生活風景を映す。好きな場所や落ち着く時間、ポジティブな感情をのせ、あえて連続性なく繋ぎ合わせた。撮られているのは「祖父」だが、撮影している側の「私」も映り込んでいるのだとわかる。「私」が「祖父」に向き合った時間や、そこで新しく編み直した関係性のようなものが‘Home’という感覚なのではないかと考えた。映ったものを大切に思うことは、自分を肯定することでもあると感じる。全体として手ブレも含め、生々しく心の揺れが表現できた。

Old Home

牧野岳 | 5分55秒 | 'Home' は概念的な表現であり、物理的な存在だけを指す言葉ではない。幼い頃から見てきた祖父母宅での光景を懐かしみ、この先のリマインダーとして記録する。

私の両親は共働きだった。特に母親は日本にいることが少なく、幼少期から祖父母の家で面倒を見てもらってきた。そして、中学生や高校生になっても、自宅と学校の中間地点に祖父母の家があったことから、約20年間ご飯をつくってもらったり、シャワーを浴びたりと祖父母の家に行かない週はないほどだった。けれども、大学生になり、住む場所が変わり、祖父母の家に行くことはとても少なくなった。

'Home' を日本語にするとなると、ただ「家」と訳すことでは済まない。'Home' には、故郷や生活、家族、愛という意味も込められているように思える。私が感じる 'Home' とは、物心がつく前から過ごしていた家であり、学校帰りに無意識に立ち寄っていた家であり、お正月を家族と過ごす家であり、4世代にわたって愛されてきた家であり、私が「Origin／起源」を感じることができる、かけがえのないその場であった。

祖父母の家に行く機会が減っていたので、リサーチのために実家まで帰って、祖父母に会い行く機会を増やした。3回に分けて撮影し、泊まりがけで撮った日もあった。自分の見てきた風景をカメラに収めようとしてファインダーを覗く一方で、祖父母に被写体として撮影されている感覚を与えないように気をつけた。

映像の編集をしていると、撮影段階では気づかなかった大事なことに気づくことが多い。絵として映えることやインサートに使えそうというフレームワークで被写体を選定することが多かったが、編集段階でそのなかにあるストーリーや情報に気がつくことができた。時計をヒントに、映像内で昼から夜まで一日の流れを感じられるようにすることで、映像内での生活の流れを意識できるような映像を意図した。

home in Tokyo（未定）

鄭禹晨 | 11分20秒 | 本作は「アイデンティティ」、「文化」、「家族」をキーワードに東京在住の台湾人の生活を記録した。調査対象者の「矛盾」と「葛藤」、彼らにとっての'Home'の定義を示す。

このプロジェクトに参加した動機は、自分と同じように東京に住んでいる外国人が母国を離れる理由とその生活を記録したいと思ったからだ。「アイデンティティ」、「文化」、「家族」の3つのキーワードに焦点を当ててリサーチを始めた。

今回の調査対象者は、台湾人の潘富琪（パンフーチー）。彼女を調査対象者として選んだ理由は、同じ会社に通い、同じ東京の豊島区に住んでいることだけではない。彼女は私と同じく1993年に台湾に生まれて、長女であるという理由もあった。この作品を通じて、彼女の「矛盾」と「葛藤」、また彼女にとっての'Home'の定義を示したいと思っている。利便性と即時性を考慮し、本作はiPhone 7 で撮影した。潘さんの通勤経路、勤務の様子を記録し、彼女の家を訪れ、手帳、スマートフォン、使用しているアプリ、弁当なども観察した。

本作では、注目してもらいたいふたつの「音」がある。ひとつ目は「環境音」。東京と台北はどちらも大都会だが、環境の音は明らかに異なっている。ふたつ目は「ナレーション」だ。台北編は日本語、東京編は中国語で表現した。外国人が日本で暮らすときに、いつもふたつの言語を切り替えて生活している様子を表現するためだ。もうひとつの意味は私たちが東京／台北いるときに、常に海の向こうにあるまち——台北／東京の風景を思い出しているのだ。

本作の取り組みを通して、自分は音に非常に敏感で、私にとって'Home'の記憶は音と共存していることを理解できた。これは意義のある発見だった。つまり、記憶に関連する音を聞くことによって、台北と東京での'Home'を思い出すのだ。それは、潘さんと料理の関係性のようなことだろうか。

参考資料

リサーチを進めていく上で参考にした
人類学や社会学の書籍、映像エスノグラフィーや
ドキュメンタリーの手法について学べる
本や映像、ウェブサイトをまとめました。

『Home: How Habitat Made Us Human』
Basic Books｜2015年
著者: John S. Allen
BOOK 01

人は、あらゆる環境や構造のなかでさまざまな同居人と一緒にいて、そこを‘Home’だと感じている。‘Home’という感覚がどうもたらされているかを知ることが重要だと教えてくれる。

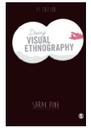
『モビリティーズ——移動の社会学』
作品社｜2015年
著者: ジョン・アーリ｜翻訳: 吉原直樹、伊藤嘉高
BOOK 02

一定の境界に枠づけられた領域としての「社会」を越える、さまざまな種類の「モビリティー（移動／移動性）」の組み合わせや相互関係に着目する視座、方法を学ぶことができる。

『モバイル・ライブズ:「移動」が社会を変える』
ミネルヴァ書房｜2016年
著者: アンソニー・エリオット、ジョン・アーリ｜翻訳: 遠藤英樹
BOOK 03

人、物、情報、イメージ、資本の移動を可能にする諸々のシステムと結びついた、モバイルな（移動性のある）「生／ライフ」の多様なあり方を知り、その未来を考えるための一冊。

『Doing Visual Ethnography The Third Edition』
SAGE Publications Ltd.｜2013年
著者: Sarah Pink
BOOK 04



調査者と調査に参加する人の協働的な関係のなかで、ビジュアルデータを用いて現実について解釈し、知を創造することを目指すビジュアルエスノグラフィーについての教科書。

『デジタル・ストーリーテリング——声なき想いに物語を』
リベルタ出版｜2016年　著者: 小川明子
BOOK 05

映像のプロではないふつうの人々が、日常生活をテーマにした身近な経験や想いを、他者と協働して映像作品に仕上げて上映する「デジタル・ストーリーテリング」の歴史、考え方、事例を学べる。

『かかわりのフィールドワーク ともにふり返る』
2019年
編集・著者: 加藤文俊
BOOK 06

社会学者加藤文俊と研究室の卒業生たちが、これまでに取り組んだフィールドワークのプロセスを振り返り、調査研究にかかわるさまざまな人との関係性について考えながらまとめた一冊。

『キャンプ論——あたらしいフィールドワーク』
慶應義塾大学出版会｜2009年　著者: 加藤文俊
BOOK 07

「キャンパス（教室）」に閉じこもった知の獲得方法から脱し、まちへ出かけて、いろいろな人とコミュニケーションを築く新しいフィールドワーク「キャンプ」という提案。

『シビックプライド2【国内編】——都市と市民のかかわりをデザインする』
宣伝会議｜2015年　著者: シビックプライド研究会
Book 08

市民がまちに対して持つ自負と愛着（シビックプライド）に焦点を当てた地域活性化策のケーススタディを紹介する一冊。加藤文俊先生は研究室で行うフィールドワークを取り上げて「まちに還す」をテーマに寄稿している。

『考現学入門』
筑摩書房｜1987年
著者: 今和次郎
BOOK 09

民族学研究者の今和次郎による、現代の社会現象や都市、風俗への観察・採集を行う「考現学」の入門書。岩佐明彦先生が震災時に持ち出したものの調査を行われたときに参考にした書籍。

『ものと人の社会学』
BOOK 10
世界思想社｜2003年
著者：原田隆司、寺岡伸悟

相手を知るきかっけとして、具体的な「場所」や「もの」にもたくさんのヒントが潜んでいることを提示してくれる、社会学の本。

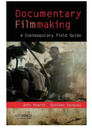
『Everything We Touch: A 24-Hour Inventory of Our Lives』
BOOK 11
Viking｜2015年　著者：Paula Zuccotti

目覚めてから眠りにつくまで、私たちは毎日どれだけのものに触れて暮らしているだろうかということをビジュアルに表現する写真集。

『Making Homes: Ethnography and Design』
BOOK 12
Bloomsbury Academic｜2017年
著者：Sarah Pink et al.

「Participatory floor plan activity」 や「Tactile time collage」など、身体的でパフォーマティブなほかの方法と、インタビューを組み合わせる調査方法を提示してくれる一冊。

『Documentary Filmmaking: A Contemporary Field Guide』
BOOK 13
Oxford University Press｜2009年　著者：J. Hewitt, G. Vazquez



初めてドキュメンタリー映像制作に取り組む人にもわかるように、制作プロセスでやるべきこと、考え方と方法を教えてくれる教科書。

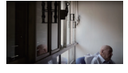
『移動する「家族」』
FILM 01
2018年
監督：大橋香奈

異国に移住した人々は、どのように「家族」と国境をまたがるトランスナショナルな交流を続けるのか。このスタディの企画ができるきっかけとなる、移住と家族をめぐる民族誌的ドキュメンタリー。

『Kitchen Stories』
FILM 02
2003年
監督：Bent Hamer

調査すること、されること。調査者（撮影者）がフィールド（現場）に入ったことで、相手の日常は「ふつう」でなくなること。リサーチが始まる前に、調査者としての姿勢を確かめるきっかけとなる。

『PHIRO』
FILM 03
2008年　監督：Gregorio Graziosi
https://vimeo.com/133488893
最終アクセス日：2020/3/10



シャワーを浴びるという極めてプライベートなシーンまで収めている、ある独居老人の日常を描いたショートドキュメンタリーフィルム。調査対象者との距離感、信頼関係を考えさせられる。

『Peter and Ben』
FILM 04
2007年　監督：Pinny Grylls
https://vimeo.com/62177206
最終アクセス日：2020/3/10

イギリスの田園風景が広がる山脈に暮らしているビーターと羊のベンの友情を記録したショートフィルム。ドキュメンタリーを撮るにあたって監督はどこまで立ち合えるのか。

『Life In A Day』
FILM 05
2011年　監督：Kevin Macdonald
https://youtu.be/JaFVr_cJJIY　最終アクセス日：2020/3/10

世界各地に住む人々が撮ったフッテージを集めて編集し、地球上のある一日の物語を紡ぎ出す。断片的に思える記録からひとつの作品が生まれる。編集方法にヒントを与えてくれた。

『難民支援協会（JAR）について【公式】』
FILM 06
2019年　制作：難民支援協会
https://www.facebook.com/ja4refugees/posts/3213792431996388
最終アクセス日：2020/3/10

故郷を追われ、日本に辿り着いた難民の現状を紹介する映像。調査対象者の顔を直接撮影できない場合でも、撮影・編集方法を有効に活かし、事情をより伝えられる可能性を示してくれる。

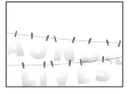
『Up In The Air』
FILM 07
2009年
監督：Jason Reitman

1年365日のうち300日以上、仕事のため全米を飛行機で移動するという暮らしを送っている主人公。彼は、自分にとって必要不可欠なものや人について考えることの重要性を説く。

『Tavarataivas／365日のシンプルライフ』
FILM 08
2014年
監督：Petri Luukkainen

監督自身が実験対象となって、持ち物をすべて倉庫に預けてから、その1年間、毎日必要なものをひとつだけ持って帰る。私たちの生活はどれだけ「もの」に頼っているのかを考えさせられる長編のドキュメンタリー映画。

『Laundry Lives』
FILM 09
2015年　監督：Sarah Pink & Nadia Astari
https://www.laundrylives.com
最終アクセス日：2020/3/28



ビジュアルエスノグラフィーの研究者・Sarah Pinkが、インドネシアで「洗濯」という行為を通して人々の日常生活をとらえ、持続可能な社会について考える共同プロジェクトの成果。

『La Mesa／Table Talk』
FILM 10
2007年　監督：Yanara Guayasamin
https://vimeo.com/1091350
最終アクセス日：2020/3/10

エクアドルで毎年11月に行われる、死者を迎えるための儀式として女性が用意する「食卓」を淡々と記録するショートドキュメンタリー映像。最後のシーンに誰もが驚くだろう。

『Transition』
FILM 11
2019年
監督：大橋香奈、水野大二郎

妊娠中の妻が病気と診断され、水野先生が2年間撮影し続けた生活記録による映像作品。国際ドキュメンタリー・フェスティバル・アムステルダム（IDFA）コンペティション部門（ショートドキュメンタリー）に入選。

『Scissors』
FILM 12
2002年　監督：Daniel Meadows
https://vimeo.com/146879045
最終アクセス日：2020/3/10

撮影をしなくても見つけた写真やものを素材に活用した、デジタル・ストーリーテリングの方法を提示してくれる2分のショートフィルム。

『Polyfoto』
FILM 13
2001年　監督：Daniel Meadows
https://vimeo.com/113843220
最終アクセス日：2020/3/10

デジタル・ストーリーの例としてイギリスの写真、ダニエル・メドーズによるショートフィルム。コンタクトシートに並ぶ48枚の証明写真から構成された2分の家族物語。

「仮設のトリセツ ――仮設住宅を住みこなすための方法――」
WEB 01
https://kasetsukaizou.jimdofree.com/
最終アクセス日：2020/3/10

東日本大震災（2011年3月11日）に際して、ゲスト講師の岩佐明彦先生が立ち上げたウェブサイト。

揺らぎを生きる「ヒント」をたずさえて

上地里佳（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー）

2018年4月15日、私は大橋香奈さんの監督作品『移動する「家族」』（2018年）を初めて鑑賞した。家族や‘Home’、移動をめぐる5人の物語が描かれた映像作品に、他者と協働しながらつくるプロセスがどうしようもなく気になっていた。そこに「東京」をとらえる手がかりを感じた私は、「東京で『つくる』ことをしてみませんか？」と大橋さんを訪ねたのだった。さまざまな理由から移動する・せざるを得ない状況が増えつつあるいま、‘Home’という感覚を探究すること、それをつまびらかにしていく過程をチームで共有することで、複雑な東京の一面をとらえることができるのではないか。そんな問いと期待から、大橋さんと「‘Home’ in Tokyo ――確かさと不確かさの間で生き抜く」を立ち上げた。

スタディに集まったのは、イマドキさを感じる20代から、酸いも甘いも知りつくした大人世代まで幅広い13名。スタディ用にひとり一冊ずつノートを配布し、活動がスタート。‘Home’という人によって異なる感覚、曖昧だけど確かにある像を描くための試行錯誤を重ねていった。作品ノートからも、他者と協働することの難しさや楽しさ、自身と向き合うなかで更新されていった思考の変遷を垣間見ることができる。

ある日、大人世代の髙山さんが「‘Home’ in Tokyo（私のなかでは、HinT＝ヒントって呼び名になっています）」とSlackに書き込んだことから、スタディの愛称はときどき「ヒント」となった。このスタディで得たものは、人によってさまざまだろう。しかし、プロトタイプとして制作した一本の映像作品と、映像として描くことに挑戦し続けるなかでの出会いや気づきを書きとめた一冊のノートを手にしたことは確かだ。そこには、何が起こるかわからないこれからの日々を歩んでいくための「HinT＝ヒント」がつまっているはずだ。ここで得た「ヒント」をたずさえることで、日常のふとしたときや‘Home’が揺らいだときの力になったら、こんなに嬉しいことはない。

編集後記

ジョイス・ラム

大橋香奈さんは大学院で同じ研究会の先輩だった。大学院生の仲間との何気ない会話で、それぞれの持つ‘Home’に対する概念は不確かなものだと気づいた。私は香港に生まれて、トロント、ロンドンの生活を経験していま東京で暮らしている。香奈さんは20回も引っ越している――「移動」しながら生きてきた私たちのように、さまざまな理由で生まれた土地を離れて生活する人はたくさんいるはずだ。私たちは新しい場所に行くときに、どのように自分のための‘Home’をつくっているのだろうか？それをテーマに、とある日本の団地で暮らすネパール人の家族の物語を取り上げて『故郷［Home］』（2015年）というショートフィルムを制作した。

その制作経験を通して、人の暮らしを見つめて理解するために映像という手段があることを学んだ。そしてさまざまな感情が交ざり合う‘Home’という概念の考え方をより広げていきたいと考えるようになった。さらに、いま振り返ってみると、それが‘Home’ in Tokyoの活動のために蒔かれた種だった気もする。なので、香奈さんから「このスタディを手伝ってもらえないか？」と声をかけてもらったときはとても嬉しかった。

普段いないはずの調査者が現場に入り、インタビューで聞かせてもらった言葉を組み合わせて、調査者として体験したわずかな生活の断片から新しいものを再構築していく。調査は「現実」を求めている一方、現場に入ることで現実にある話から新しい現実の「見方」を生み出していく。しかしこの冊子を最後まで読むと、‘Home’ in Tokyoの最大の特徴は調査者と調査協力者が二人三脚で、お互いに認識を深めながら作品をつくっていくことはではないかと思う。

この半年のスタディに参加して、またこの冊子を編集するプロセスで、調査者と調査協力者と協働しながら作品をつくっていく姿勢を久しぶりに思い出すことができた。この丁寧なまなざしを、今後も覚えておきたいと思う。

東京プロジェクトスタディ3
‘Home’ in Tokyo
— 確かさと不確かさの間で生き抜く

ナビゲーター　大橋香奈
スタディマネージャー　上地里佳（アーツカウンシル東京）
——
編集　ジョイス・ラム
デザイン　丸山晶崇（株式会社と）
執筆　染谷めい（PP.16−27、30−39）、廣瀬花衣（PP.28−29）
テキスト構成　森部綾子（PP.16−27）、染谷めい（PP.28−29）
——
本冊子はTokyo Art Research Lab「思考と技術と対話の学校」の一環として制作されました。
——
Tokyo Art Research Lab（TARL）とは
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京の人材育成事業として、アートプロジェクトを実践するすべての人々に開かれ、ともにつくりあげるリサーチプログラムです。現場の課題に対応したスキルの提供や開発、人材の育成を行うことから、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。
http://tarl.jp

［発行・お問い合わせ］
発行日　令和2年6月10日
発　行　公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-28 九段ファーストプレイス8階
Tel 03-6256-8435　Fax 03-6256-8829　https://www.artscouncil-tokyo.jp
ISBN 978-4-909894-10-6 C0070

ARTS COUNCIL TOKYO

tarl
TOKYO ART RESEARCH LAB

文化でつながる。未来とつながる。
Tokyo Tokyo
FESTIVAL